

## 「遠さ」と「近さ」の観点からみた「言葉」の問題

——『存在と時間』を始点とした「見ること」から

「聴くこと」への転換——

渡辺 和典

### はじめに

ハイデッガーの思惟の過程において、「言葉 (Sprache)」の問題がその思索の開始時から大きな比重を占めていたことは、彼自身が述懐していることからよく知られている<sup>1)</sup>。とりわけ、第一の根本書である『存在と時間』における「言葉」の問題の位置づけを究明することは、以後の思索において「言葉」の問題がさらに問われてゆくことに鑑みれば、重要な課題であると思われる。『存在と時間』における「基礎的存在論 (Fundamentalontologie)」が当初の計画通りには完遂されえなかつたにもかかわらず、ハイデッガー哲学は一貫して、なんらかのかたちで、「言葉」の問題と格闘しつづけたのである。もちろん、根本的に問われつづけられているのは「存在 (Sein)」であって、存在が「存在論 (Ontologie)」として語られる以上、つまり、Logos に関わり

つたなされる以上 (SuZ, §7)、「言葉」にかんする問題は、少なくとも『存在と時間』の時期においては「存在」とともに主題とされている、と言うことができる。しかし、その内実は様々なる意匠において語られているのであるから、それぞれの時期における「言葉」のもつ問題系の位置づけを判明しておかねばならない。

本稿は、第一に『存在と時間』における「言葉」という概念を判明にし、かつその限界を示すことを目的とする。その際、「近き」と「遠き」という表現を手引きとすることをもって、『存在と時間』以後の思索への橋渡ししつつ、「言葉」と「存在」との関係を浮き彫りにしたい。というのも、よく知られているように、「近き」と「遠き」は一九三〇年代以降のハイデッガーの思索のなかで重要な術語として用いられるようになるからである<sup>(2)</sup>。以上の作業を通じて、「言葉」のもつ根本性格が「見えるようにせしめること (Sehen lassen)」から「聴くこと (Hören)」へと変奏されることの一端を示すことで、「言葉」という事象を考察するための解釈の土台としたい。

### 1. 「近き」と「遠き」の本質は自己理解の度合いの問題であるとしよう

「近き (Nähe)」と「遠き (Ferne)」という表現は、『存在と時間』のつぎの文章によって、つとに知られている<sup>(3)</sup>。「現存在 (Dasein) はなるほど存在者的には (ontisch) 近いものであり、さらには最も近いものでさえあるのみならず、それどころか、われわれが各々現存在それ自身でさえある。それにもかかわらず、或いはまさにそれ故に、存在論的には (ontologisch) 最も遠いものである」(SuZ, 15)。ハイデッガーは『存在と時間』において述べられた「近き」と「遠き」に関して、詳細な言及、分析を行ってはいないが、その内実を浮き彫りにすることは可能である。したがって、『存在と時間』における概念系においてこの遠近問題がどのような位置づけを得ることができるのか、を検討しなければならない。

まず、事柄に関して確認しておけば、「近さ」や「遠さ」ということが問題となる以上、そこには、「距離 (Distance)」の問題が伏在している、ということである。近いや遠いとは、本来、或るものと或るものとの関係性と言い換えることができるのでなければならぬ。或るものが、或るものに対して近かったり、遠かったりするものである。もちろん、ここで念頭に置かれている距離や或るもの同士の関係性は、「存在者 (Seiendes)」の間での問題ではないし、ましてや物理的な次元での設定を述べているのでもない。「現存在は、われわれが現存在それ自身でさえある」という表現からも分かるように、それは、現存在自身の自己自身に対する関わり合いの問題なのである。このことは、「存在の問い (Seinsfrage)」の内実からしても明らかである。つまり、「存在の問い」は、現存在の存在「が」自らの存在「を」問うこと (Fragen) であるからだ。さらに、現存在の存在を定式化して述べている命題、「この存在者にとってはその存在においてこの存在そのものが関心的となっている」(SuZ, 12) という表現からも、自己関係性が明らかに読み取れよう。それは意識の「反省」ではなく、「存在の関わり合い (Seinsverhältnis)」である。そして、「存在と時間」の方法論の要諦は、現存在の「存在理解 (Seinsverständnis)」を手引きとするが故に、先に掲げた命題における「近さ」と「遠さ」が含意しているのは自らの存在への関わり方の度合い、つまり、自己理解の度合いである、と言うことである。

では、「近さ」と「遠さ」を自己関係性における理解の度合いとしてみた場合、そのような「近さ」と「遠さ」はそれぞれどのような様相を呈するだろうか。先の、「近さ」と「遠さ」を述べている命題に続く箇所ではハイデッガーは、現存在の存在の傾向として、「自らに固有の存在を、現存在が本質上、たえずかつさしあたり関わりあっている存在者から、(つまり)『世界』から理解」(SuZ, 15) していると論定する。この場合の存在理解、すなわち、自己理解が「存在者的な近さ」のうちにあると言えるような自己関係性である。つまり、存在論的な考察を加えずにただ、目の前に見出されるような存在者に定位して、自らの存在を理解しようとすることである。他方、

自己関係性として見た場合の「遠さ」は、まさに自らの存在を「世界」に、ここでは「直前的存在者 (Vorhandenes)」に定位するのではなく、存在論に定位して理解しようとすることに存する。この作業そのものが「基礎的存在論」の意図するものであって、いまだそれがなされていない以上、即ち、存在理解の仕上げがなされていない以上、自己理解の度合いとしてはいまだ「遠い」と言うことができるのである<sup>(4)</sup>。

## 2. 自己理解の度合いはその本質を「言葉」のうちに有するということ

現存在の自己理解の度合いが「近さ」と「遠さ」という表現において言い表されていることが明らかとなった。では、この自己理解はどのような仕方でその度合いを増したり減じたりするのであろうか。理解の度合いが増したり減じたりする、と言うことができるのであれば、そこで増減するような或るものが要請されるだろう。しかも、自己理解における「理解 (Verstehen)」をハイデッガーの術語として捉えるのであれば、「理解」は「存在の問い」を導く唯一の手引きである。『存在と時間』において「理解」は、「理解を形成したものの (Ausbildung des Verstehens)」(SuZ, 148) としつつ「解釈 (Auslegung)」になり、さらに「解釈の派生的様態としての言表 (Aussage als abkünftiger Modus der Auslegung)」(SuZ, 153)へと進む。そのような「(存在) 理解」が度合いを増すのは、言い換えれば、存在論的な「遠さ」がより「近み」へともたらされるのは、「基礎的存在論」が遂行されることにおいて、であろう。そしてその遂行は、端的に言って、「言葉」においてなされる。「理解」が「言表」へいたること、具体的には、「平均的で漠然とした存在理解 (das durchschnittliche und vage Seinsverständnis)」(SuZ, 5) が「判断」というかたちで表現されることから分かるように<sup>(5)</sup>、「言表」すなわち広義における言葉が、理解の度合いにおいて増減する或るものである。というのも、存在論という学問における「学的解

釈 (Interpretation)』とは、このような言表の集成からなるのであり、さらに言えば、「言葉」の自己展開 (Selbstentfaltung) であるからだ。展開される「言葉」が存在を概念把握しようとするならば、或いは、存在理解が「言葉」において顕になればそれだけ一層、存在が存在論的に「近み」へともたらされると言えるのである。ハイデッガーが、「言葉」における自己展開において「遠さ」と「近さ」を把握していたということは、つぎの表現のうちに読み取ることができる。「あらゆる根源的に汲み取られた現象学的概念と命題は、伝達された言表としては、墮落すること [Bartung] の可能性のうちに存している」(SuZ, 36)。つまり、命題として表現された「言葉」は、それを読む、或いは聞くその仕方によって、真正に理解されずれば、おそらくは大いに、むしろ本質的に誤読や誤解の可能性にさらされている。或るテキストに書かれた「現象学的概念と命題」は、それをなぞるだけでは、いまだ自己理解の度合いとしては「遠さ」のうちにあるだろう。むしろ、現存在が「各私性 [Einsigkeit]」によって特徴づけられているように、自らが自らの「言葉」において自己理解を深めることこそが、「近さ」をもたらす「振る舞い [Verhalten]」であらねばならない。だから「伝達された言表 [mitgeteilte Aussage]」としては、墮落する可能性」をもつと言われるのである。

### 3. 『存在と時間』における「言葉 (Sprache)」の含意するもの

「近さ」と「遠さ」とは「言葉」の問題である、ということが浮かび上がったいま、そもそも「言葉」がハイデッガーによってどのように把握されていたのかが検討されねばなるまい。以下、『存在と時間』の論述を追うことによってこれを具体的にしよう。

「語り語りだされたものが言葉である [Die Hinausgesprochenheit der Rede ist die Sprache]」(SuZ, 161)

とハイデッガーは規定する。問題は、この Hinausgesprochenheit の内実である。接頭辞として機能している hinaus は「内から外へ」、或いは「くからくへ」という方向性を含意している。もちろん、ハイデッガーは素朴な主客関係や、意識する自我から外界へという意味でこれを用いているのではない。現存在はその存在体制として、つねにすでに「脱自的」(Ekstatisch) 有るからである。とすれば、ここで「内から外へ」移行するもの、或いは、「くからくへ」という次元の転換が意味するものとはなんであるのか。われわれはこれを「存在論的差異」(ontologische Differenz) に着目することによって解釈できると考えたい<sup>(6)</sup>。「語り」(Rede) は「実存論的—存在論的」概念 (existenzial-ontologisch) 即ち「実存カテゴリー」(Existenzial) であつて、現存在が存在するのであれば必然的にとらざるをえない体制のひとつである。この存在論的概念が存在者的な次元へと至つたものが「言葉」であり、「内世界的存在者」(「直前的存在者」であれ「手許的存在者」であれ) という次元で捉えられたものが「言葉」であると言えるのではないか。即ち、存在論的次元「から」存在者的次元「へ」という転換が「言葉」において生じるのだ、と言えないだろうか。右の引用箇所が続けてハイデッガーは述べている。「言葉という」この語全体は、その語全体のうちで語りはある固有な「世界的」な存在をもつのだが、そのようにして内世界的存在者として、手許的存在者がそうであるように、目前に見出されるのである<sup>(7)</sup>。この引用において、「世界」が括弧に入れていることは、「世界性」の分析において規定されたように (SuZ, 65) 存在者的概念として「直前的存在者」を意味する。そして、端的に「内世界的存在者」として見出されるとも言われている。「語り」が語りだされたものとしての「言葉」は、「語り」という存在論的次元の存在者的な具現化であると言える。フォン・ヘルマンによれば、「hinaus とは自的な内在性から外在性へ、ではなく、この hinaus は脱自的—地平的な開示性から、有りつつある語の音声化 (die seiende worthafte Verlautbarung) く」を意味するのである。

以上のことから、「言葉」とは、或る存在者として、なんらかの音声的な或るもの、さらには音声化へともたら

されるものをも含むことになるだろう。つまり、話すという行為に加えて、書字をも「言葉」に含めることができる。ギンター・ファイガールは、「ハイデッガーは『言葉』ということと、『語り』のそのつどの音声的、文法的、語彙的打ち出し〔Ausprägung〕を理解している」<sup>(8)</sup>と解釈している。このことは、とりわけ音声を発したりなにかに書き記すという「振る舞い」に着目するのであれば、身体的行為一般へと拡張可能である。即ち、われわれが事実に身体的に存在することを意味する<sup>(9)</sup>。しかも、「言葉」はそれ自身の位置づけに関して、存在論的次元の存在者的な具現化、さらには、現存在がそうであるのと同様に、「存在論的—存在者的に有る〔ontologisch ist〕」(SuZ, 12) とも言えるのである<sup>(10)</sup>。

#### 4. 「言葉」の役割と「近さ」との関係

「言葉」は、「存在論的—実存論的」構造としての「語り」が、「存在者的—実存的」に語りだされたものであり、それは行為一般へと拡張されるということを確認した。「世界—内—存在の情態的な理解可能性は自己を語りとして語りだす」(SuZ, 161) ということは、つねにすでに、「語り」は外へと語りだされ (aussprechen)、それとして機能してしまっていることを謂う。

さて、「基礎的存在論」を遂行することは極めて独自の振る舞いである。そしてこの存在論を「論」として成り立たせている当のもの、事象としての存在を語る「言葉」であると言えるのでなければならぬ。では、そもそもハイデッガーによる言葉概念を根本で支えているのはなにか。それは『存在と時間』第七節においてなされる *Logos* 解釈である。というのも、「言葉」がその根をもつところの「語り」は、*Logos* の翻訳とされているからである。したがって、*Logos* が有する根本意義は、なんらかのかたちで「言葉」にも反映されていなければな

らない。

では、*Logos* の根本意義とはなんであるか。ハイデッガーは、「*Logos* の根本意義は語りである」(SuZ, 32) とし、「語る」と (Reden) を「見えるようにせしめること (Sehenlassen)」(ebd.) と言い換えている。さらに続けて、「語ること (見えるようにせしめること) は、その具体的遂行においては、話すことという性格 (つまり) 諸々の語における音声上の発言 [stimmliche Verlautbarung in Worten] という性格をもつ」(ebd.) と言う。ここに明らかなのは、「基礎的存在論」における *Logos* の役割は、現象を「見えるようにせしめること」なのであって、「見る」という、視覚的な表現をもつて語られていることである。*Logos* の根本性格が、或るものを「見えるようにせしめること」と規定されているのである。このことから、*Logos* の訳語としての「語り」、そしてこの「語り」の派生的形態としての「言表 [Aussage]」、総じて「言葉」が可能とされる。一九二七年夏学期講義『現象学の根本諸問題』においても、「言表することは存在者を挙示という仕方で見えるようにせしめることである」<sup>(1)</sup> と述べている。

現象学的概念、或いは命題としての「言葉」は見えるようにさせる或るものである。なにをか。「存在者の存在」を、である。ところで、見るという語彙が本来含意しているように、或るものが見え得るのは、そこに距離が介在してはじめて可能であろう。しかも、見ようとしている或るものをよりよく見ようとするのであれば、それを近づけることが必要とされる。この事態をハイデッガーはどのように捉えているのだろうか。

「距離」ということが問題となる場合、それは『存在と時間』においては世界分析、とりわけ存在者との関わり合いが分析される箇所に取り上げられている。「距離」は現存在分析においては「空間性 [Räumlichkeit]」の問題である。その「空間性」は物理的、延長的に考えられているのではなく、「遠さを一除けること [Ent-fernung] と方向をとること [Ausrichtung] という性格」(SuZ, 105) をもつとされる。そしてこのような特徴づけに続け



て、ハイデッガーはこの「遠さを一除けること」を「近づけること」〔Näherung〕(ebd.)とし、「現存在には近さへの、或る本質的傾向が存している」(ebd.)と述べる。そして、近づけるとは、そのつど存在者を「近み」へともたらずことにほかならない。「取り除ける (Entfernen)」とは、遠さを消滅させることであり、つまり或るものが離れてあること (Entfertheit von etwas) を消滅させること、近づけることである。現存在は本質的に、遠さを一除けつつあり、現存在はそれが有るところの存在者として、そのつど存在者を近さのうちへと出会わせている (ebd.)。フォン・ヘルマンも解釈しているように、「遠さ」の消滅とは、「存在者の近さとして存在者が発見されていることへと、存在者を引き入れるようにせしめることとして、発見されざることを消滅せしめること (Verschwindenmachen der Unentdecktheit als Entdeckenlassen des Seienden in seine Entdecktheit als seine Nähe)」<sup>(23)</sup>なのである。

「言葉」は或るものを「見えるようにせしめること」にその本質を有し、「近づけること」は、存在者と関わりを持つことである。現存在はつねにすでになんらかの存在者と関わりつつあるということが、「存在者を近さのうちへと出会わせている」ということである。したがって、学的な存在論が問題となる場合には、存在者をその存在にいたるまでよりよく見ることが課題とされ、そのような存在者との特別な関わりを担っているのが近づける「言葉」である、と言えるだろう。

##### 5. <存在者的な近さ>と<存在論的な近さ>の差異と、その差異そのものの生起としての「言葉」

1. で確認したように、現存在は存在者的には近く、存在論には遠いとされていた。4. での考察からは、「言葉」が存在者を「近み」へともたらし、これを見えるようにさせることをその性格とすることをみた。では具体

的に「言葉」が存在者を「近み」へともたらずとはどのようなことであるのか。また、この「言葉」がもたらす「近み」と、現存在が存在者的には「近い」ということの「近さ」の内実は同じなのだろうか。これを検討する必要がある。

現存在が存在者的には「近い」ということは、われわれ自身、各々が現存在自身であることから「近い」とされた。このことは、われわれが自己理解を深めようが、ただ漫然と日常をいきていようが、「近い」ということは変わらない。他方、「言葉」がもたらす「近み」とは二重に規定されねばならないのではないか。つまり、物事を説明することや、日常的なおしやべりをする等の場面において存在者が「近さ」へともたられること、つまり、存在者を発見しつつそれと存在者的な次元で交渉 (umgehen) している場面と、存在論という仕方では存在を問いつつ「言葉」を使用することでの「近さ」との間では違いがあるのではないか、ということである。つまり、「存在者的な」近さと「存在論的な」近さの違いである<sup>(13)</sup>。日常的な場面において、「言葉」はそれが話題とするような或るものを言い表すという、その限りで存在者を「近み」へともたらずということができらるだろう。他方、存在論を遂行する場合には、存在者を「近み」へともたらずではなく、「存在者の存在」を、表立った仕方で (ausdrücklich)、「近み」へともたらずでなければならぬ。それゆえに、現存在は存在論には「遠い」と、はじめに言明されていたのである。考究されねばならないのは、この存在論的な「近さ」である。

現存在、或いはその存在に関する分析が、存在を存在論な「近み」へもたらしたということができらるためには、存在が語られる言表のあり方が、存在者的な言表のあり方と区別されねばなるまい。このような語り方の次元の違いをハイデッガーは、一九二八年夏季期講義において「本質言表 (Wesensaussage)」と「実存言表 (Existenzaussage)」との区別として述べていた<sup>(14)</sup>。同時に前者を「存在論」或いは「実存論的言表」、後者を、「存在者的」或いは「実存的言表」とも言っている。言わば、語られる内容が異なるものであるかによって、「言葉」による

表現は存在論的か、存在者的かに分かれると言えるのである。「存在と時間」、すなわち「基礎的存在論」という構想のもとでのあらゆる命題は、存在論的な言表として特徴付けられねばならない。現存在の分析論において行われるあらゆる言表は、その存在の根本体制を表現するものであるからだ。したがって、人間的現存在のそのつどの現状や、事実に実存することの有様を描き出しているのではない。むしろ、人間的現存在が実存するのであれば取らざるを得ない、根拠・本質を述べているのである<sup>15</sup>。

このような区別を設けることによって、ハイデッガーは存在者だけが語られる言表と、その存在を視野に入れて存在論を遂行する場合の言表とを峻別したと思われる。つまり、このことは「言葉」の次元に存在論的な差異を見出したということと同じである。しかしこのような区別は、「言葉」そのもののあり方を無視したものとならざるを得ない。即ち、「言葉」に次元の違いを見出すような所作は、その存在者に関する言表であれ、その存在に関する言表であれ、そもそもそのいずれもが「言葉」を用いて表現されるといふ点を無視している、或いは脇に置いてある、ということである。より敷衍して言えば、いずれもが「言葉」として生起しているということ、次元の差異そのものが「言葉」として生起しているということが、まさに問われねばならないはずなのである。

なるほどハイデッガー自身、「言葉」のあり方に関して以上のような事情が存していることを意識していたと思われる。事実、「語りと言葉」を扱った『存在と時間』三十四節の最後では、「言葉のあり方〔die Seinsart der Sprache〕」に関していくつもの問いが立てられているからである(Suz, 166)。しかしながら、『存在と時間』においては、この「言葉の本質」に迫る分析はなされずに置かれたのである<sup>16</sup>。ではどこに、「言葉」に関するこのような差異の問題はその原因をもつのだろうか。われわれはそれを『存在と時間』における *Logos* の規定のうちに見る。いま一度、この規定に立ち返って、これを考察しよう。

## 6. λόγοςの規定としての「見えるようにせしめること」がもつ限界

4. で確認したように、λόγος、ひいては「言葉」の根本性格は「見えるようにせしめること」であった。ところで、「見る」という視覚的表現がλόγοςの根本性格にあてがわれていることは、どのような事態を含蓄しているだろうか。「基礎的存在論」においては、「存在者の存在」をそれとして概念把握することに主眼が置かれている。λόγοςの根本性格は、より精確には、或るものを或るもの「として」見えるようにせしめることである。したがって、λόγοςは、存在「を」存在者の存在「として」見えるようにせしめることを本務とする。ここには、「として」(εἰς)を媒介とする差異構造が介在している。「差異」とは「存在論的な差異」を意味する。つまり、この差異構造とは以下の事態を謂うのである。現象学におけるλόγοςが見させるのは「存在者の存在」であるが、それは、或るものを基盤「として」、即ち存在を基盤として、のことである。ところで、存在を見るようにせしめるということは、存在者の存在「として」という構造をとる。つまり、存在者において存在が見えるようになるということである。しかしそれは、端的に存在を見るようにせしめることではない。『存在と時間』の道具分析の手順をみても、「世界におけるかつ内世界的存在者との交渉」(SZ, 66f.)を手引きにしてその存在構造を示すという方法が採られているのであって、存在が存在者を経ずに端的に示されるわけではないのである。

ここで、ひとつの解釈を試みることにしよう。「存在者の存在」を探求するにあたって、存在者を媒介にしてその存在を見るようにせしめることが、「基礎的存在論」においてなされた。つまり、「存在を存在者の存在」として見えるようにせしめたわけである。では、「言葉」という存在者そのものの位置づけはどのようなものになるのであろうか。ここでの「言葉」とりわけ存在論を遂行する「学的解釈」の表明としての「言葉」は、ハイデッガー自身が言及していたように、存在者と見なすことができるだろう。そして、その「言葉」は存在を見るよ

うにはするものの、それ自身、存在そのものではない——むしろ存在を宿している、囲っていると表現すればよいだろうか——<sup>(17)</sup>。「言葉」は存在に対してなんらかの関係を有するが、それ自身、存在そのものとして有るのではない、ということになる。つまり、「存在と時間」における術語を用いるのであれば、「存在者の存在」を見えるようにせしめる「ための」(zum Ende)「手許的存在者」、さらに言えば「記号」ということにもなる<sup>(18)</sup>。

さらに、「言葉」が存在を見えるようにせしめることは、ただ自らがそれ自身であるところの現存在に対して見えるようにする方向、即ち、自己理解の度合いを深める方向と、誰かに対して見させる方向、即ち、「共に現にある存在者 (Mitdasein)」に対して存在者の存在を見させるという方向を有するだろう<sup>(19)</sup>。もちろん、現存在は「各私性」によって特徴づけられるのであるから、「存在の問い」もまた、それぞれが自身の「存在理解」を手引きとしてなされねばならないのは言うまでもない。だからといって、各人が自ら思索を行う場合に、ハイデッガー自身の存在論を手引きとしてはならない、ということにはならない。ハイデッガー自身もまた、過去の伝統、伝承、遺産を手引きとし、これらと対決しつつ自らの思索を展開したのであるからだ。このように見た場合、「学的解釈」というものは、そこに書かれたものを読むという仕方で「見る(理解する)」、或いは「見る(理解する)」という仕方です「読むこと」によってなされると言える<sup>(20)</sup>。これは極めて自明かつ自然なことに思われる。ここには、ハイデッガーが logos の性格として読み込んだ、「見る」という働きがもつ固有の性格が現れている。結論から言えば、無意識的にはあれ、存在が見られるものとして立てられていたのではないか、ということである。見られたものとしての存在と、それを見るものとしての存在者というように、「見る」という事態には志向的な二項的關係性が含意されてしまう。或いは、見られるものとしての存在は、誰かにとって見られるということだが、「見る」という表現には暗黙のうちに前提されてしまう。

「見る」ということには「距離」が介在する。見られるものとしての存在は、存在論的には遠い。そのような存

在を存在論に「近み」へともたらずこと、これが「基礎的存在論」の果たすべき役割であつたはずである。しかし、「存在者の存在」を「近み」へともたらずことがうまくいけばいくほど、或いはそれが見るものにとつて近づけば近づくほど、逆に、その存在はぼやけ、見えなくなるのではないだろうか。さらに言えば、「見ることに」定めた方法論では、見るものとしての眼はけつして自らの眼を見えるようにせしめることはできないであろう(2)。そして、存在を「近み」へともたらず役割を担っている「言葉」が、その存在に関して問われる場合には、事態はさらに紛糾してしまわざるを得ないのである。自己理解の度合いの深まり、つまり存在論的な「近さ」のうちにあることは、まさにその「近さ」をもたらず「言葉」、或いは「近さ」を自己展開する「言葉」という壁にぶつかり、その深まりのさらに深淵に向けて跳び込むことができなくなってしまうのである。

## 7. 「見ること」から「聴くこと」へ

「言葉」は存在者を「近み」へともたらず、そのようにして存在を「見えるようにせしめる」役割を担っていた。しかし、このような仕方では存在を思索することは、いま確認したように二項的分裂を前提としてしまう。これは『存在と時間』がそのはじめから回避している主客関係という伝統を、ふたたび引き寄せてしまうことではないだろうか。「見る」という方法論に定位した場合の「言葉」の問題、しかも「見ること」を可能にしている「距離」という意味での「言葉」の問題は、まさにこの「見ること」がもつ限界と軌を一にしていた。或るものと或るものとの二項的關係は、その關係を關係たらしめている「言葉」をその本質にまで向かつて問うことができないうのも、或るものをより近くに見たり、或いはより遠くに見たりする場合、いずれにしてもそこでは「言葉」をもつて見えさせることになつてしまふからである。

では、見られるもの（見られたもの）としての存在とは別の可能性はどこに開けているのだろうか。周知のように、一九三〇年代以降のハイデッガーはヘルダーリンを同伴者とするので、「聴く」という可能性を自覚的に引き受け、その思索を深めることになる。たしかに、こうした「聴くこと（Hören）」への着眼は、すでに「存在と時間」における「良心の呼び声」が示していた。呼び声はそれが呼ぶ以上、その呼び声を「聴くこと」が問題とされていた。とはいえ、この分析は「実存論的分析論」の一部で扱われるにとどまり、いまだ「聴くこと」の本質へと向かう思索はなされてはいなかった。むしろ、「聴くこと」は「理解」に従属するという位置づけを与えられていた (SuZ, 163)。

「聴くこと」への着眼がより重要性を増して述べられるのは、一九二八年夏学期講義に付けられた付録においてであろう。「人間とは遠さの存在である！そして、人間の内には諸々の物への真の近さが育ち始めるのだ。そして遠さの内へ聞き入る」と (das Hörenkönnen in die Ferne) ができて初めて、その近くにいるはずの人間たちの応答に対する覚醒が時熟せられるのである<sup>(22)</sup>。ここでは、「聴くこと」が「遠さと近さ」の文脈において述べられている。「聴くこと」は、「見ること」のように二項的関係性を持つものではない。一見、語るものがいてその語られたものを「聴く」というように捉えられがちであるが、そうではないだろう。「聴くこと」は、最終的には、自己において、聴くことである。とりわけなにかを省察、熟考し、或いは思索をなすという場合、そこで行われているのは、誰か具体的な人との対話であるというよりは自己内対話というのでなければならぬ。しかも、厳密には対話であつて対話でないような出来事である。というのも、或ることを「聴くことと、或ることを「が」語られることとは同一の出来事だからである<sup>(23)</sup>。絶対的な「近さ」、つまり「聴くこと」は二項的関係性を前提とするような距離の介在を打ち破り、絶対的な「近さ」において生起するのである。

そうであるならば、本来、この「近さと遠さ」は、「見ることに定位した意味での「近さと遠さ」でもはやないことになる。しかし、ハイデッガーはまだこの段階では、「見ることに定位した「近さと遠さ」を突き破っていない。というのも、この一九二八年の段階では「基礎的存在論」構想がまだ存続していたからだと思われる<sup>24</sup>。「基礎的存在論」は「存在理解」を手引きとする。われわれは「近さと遠さ」が自己理解の度合いに関する<sup>25</sup>ことを見た。とすれば、ここでの「遠さ」はまだ「存在理解」との連関において捉えられ、自己理解の度合いとして考えられていることになる。引用の後半で、「人間たちの応答に対する覚醒」が語られるが、これも次のように解釈できる。つまり、「遠さ」に聞き入り、自己理解を増した現存在は、「本来性」へと変容しうるだろう。そして、その本来的現存在は、それ自身、他の人間的現存在が「本来性」へ覚醒するための契機となる、ということである<sup>26</sup>。

それでもこの「遠さの内へ聞き入る」と表現されていることは注目し値するだろう。それは、「遠さ」においてではなく、「遠さ」へと「聴くこと」であるからだ。聴くことの通常の表現からは逸脱したこのような「遠さ」と「聴くこと」の関係性のうちに、「基礎的存在論」とは別の思索の可能性の一端が示されているのではないだろうか。この表現が本来的にもつ事象的性格への気づきが見ることに定位した方法論を超えて思索することを可能にしたのではないか。「聴くこと」は、言われつつあることを聴くことであり、これはもはや、存在を見えるようにせしめるという言葉の役割では捉えきれないことである。むしろ、存在が語ることを聴くこと、それは、存在の傍らに有りつつ、言うことに静かに耳を傾けることであろう。たしかに、これをもって直ちに、一九三〇年代以降における「言葉」の問題を説明できるわけではない。しかし、少なくとも、このように「聴くこと」の本質への気づきは、この一九二八年講義補遺を見る限りたしかにその一端が先示されていると言えるのではなからうか。



## 略記法

- ・ SuZ ち' Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 17. Aufl., Max Niemeyer, 1993 の略とちる。
- ・ GA は' *Martin Heidegger Gesamtausgabe*, Vittorio Klostermann の略とじ' 巻数、頁の順で記す。
- ・ 引用文中、筆者による補足は〔 〕をもって記した。また、原文における強調は付点をもって、筆者による強調は傍線をもって表した。引用文中の引用は『 』をもって表記した。
- ・ ドイツ語からの引用に関して、訳文は原則として筆者自身によるものであるが、既訳のあるものについてはそのつと参考になさせていただいた。

## 〔註〕

- (1) Vgl. GA I, 55.
- (2) Vgl. Emil Kettering, *Nähe Das Denken Martin Heideggers*, Pfullingen, 1987. (川原栄峰監訳『近さ——ハイデッガーの思惟——』理想社、一九八九年参照)。
- (3) 「近さ」の問題は、すでに一九一九／二〇年冬学期講義に見出すことができる。「事象的生においてわれわれは生きているのである——われわれがその生自身であり、生はわれわれにとって絶対的に最も近いものである」(GA 58, 174)。<sup>9</sup> Ferner, vgl. GA 20, 202.
- (4) ひとつ注意しておいてよいのは、存在論的な「遠さ」は、自己理解の度合いが深まればそれだけ一層、存在論的な「近さ」のうちにもたらされるであろうということである。したがって、このように存在論的な「近さ」という表現は可能である。他方、存在者的な「近さ」は、存在者的な「遠さ」へと移行することがあるのであろうか。この問題

についての考察は脇に置くことにする。ただ、仮に可能だとすれば、自己の存在を問えないような現存在ということになるのだろうか、これは現存在の規定に反する。したがって、存在者的な「遠き」と言うことはできないのではないか。

(5) ハイデッガーは、「言表」を「判断」と言い換えてくる (SuZ, 153)。よって、第一義的には「言表」は主語と述語を伴った命題、陳述と解してよいであろう。

(6) ハルバリッチは、ハイデッガーの言葉に関するあらゆる思索は「存在論的差異」を前提していると断言する。Vgl. Damir Barbarić, "Hörendes Denken" in: „Dimensionen des Hermeneutischen“ *Martin-Heidegger-Gesellschaft Bd. 7*, Frankfurt a. M, 2005, 48. また、ランフォントは、言葉が存在論な次元から存在者的な次元への「転換の役割 [Transferrolle]」を果たしていることを表現している。Vgl. Cristina Lafont, "Die Rolle der Sprache in 'Sein und Zeit'" : in Hubert Dreyfus, Mark Wrathall, ed., *Heidegger Reexamined vol. 4*, New York, 2002, 53-71. トキム・ヘルマンも言葉の位置づけを問的、媒体的に見ている。Vgl. Friedrich-Wilhelm von Herrmann, *Subjekt und Dasein*, 2. Aufl., Frankfurt a. M, 1985, 150, 152. また、ヘルマンの初期の論考では「言葉は、そこにおいて人間がかれの滞在地をもち、そこから人間が自己自身と存在者を理解するところの媒体 [Medium] なのである」と述べている。Vgl. Friedrich-Wilhelm von Herrmann, *Die Selbstinterpretation Martin Heideggers*, Meisenheim a. G., 1964, 196.

(7) Vgl. Herrmann, *Subjekt und Dasein*, 149. Ferner, vgl. 131 ff.

(8) Vgl. Günter Figal, *Martin Heidegger Phänomenologie der Freiheit*, 3. Aufl., Weinheim, 2000, 170.

(9) Vgl. Herrmann, *Subjekt und Dasein*, 146. また、「語り」が「語りだされたもの」としての「言葉」は、現存在の振る舞い一般、つまり存在者との交渉にまで拡大して解釈可能である。この方向で、「言葉」の限界が、現存在が

「見廻し的に対処する」（um-sichtig Besorgen）」の限界についても進む解釈として、vgl. Manfred Stassen, *Heideggers Philosophie der Sprache in 《Sein und Zeit》*, Bonn, 1973, 145.

(10) 時代は経るが、ハイデッガーは『思索の事柄へ』のなかで、「言葉」が「存在者的一存在論的にある（ontisch-ontologisch ist）」とする点を示している。Vgl. Martin Heidegger, *Zur Sache des Denkens*, 4. Aufl., Tübingen, 2000, 55.

(11) Vgl. GA 24, 312.

(12) Vgl. Friedrich-Wilhelm von Herrmann, *Hermeneutische Phänomenologie des Daseins II*, Frankfurt, 2005, 243.

(13) 管見によれば、ハイデッガーが「存在論な近さ」という表現を用いている箇所は発見できなかったが、事柄としてみれば、このように表現可能であると思われる。

(14) Vgl. GA 26, 217. (酒井潔訳、ハイデッガー全集第26巻『論理学的形而上学的な始元諸根拠』、創文社、二〇〇二  
年参照)。

(15) Ebd.

(16) 『存在と時間』での「言葉」の解釈は、現存在分析のなかのどこにその位置づけを得るのか、ということを示するにとどまってしまうとハイデッガーは断っていた (SuZ, 166.)。

(17) もちろんここで『ヒューマニズム書簡』で世に知られている「存在の住居」としての「言葉」を想起しても間違いないだろうが、詳細な考察は本稿では行えない。

(18) 「…に対する記号存在（…を表示する記号であること）」は或る普遍的な関係の仕方へと形式化されることができ、その結果、その記号構造そのものがあらゆる存在者一般の『性格づけ』のための或る存在論的引きの役割を務め

る」(SuZ, 77)。

(19) Vgl. Fígal, op. cit., 172.

(20) 「見る」と「理解すること」は「基礎的存在論」においては密接に連関して働いている。このことは「存在理解」という手引きを用いて存在の問いを遂行する以上、そこに「見る」という働きは共に働いてしまっていることを意味する。逆に言えば、「存在理解」という手引きが放棄されることと、「見る」と「理解すること」に足場を置いた方法論の放棄とは軌を一にしているということである。フッサール現象学における見る作用と、ハイデッガーにおける「見る」と「理解すること」の関係性については、vgl. Gisbert Hofmann, *Heideggers Phänomenologie*, Würzburg, 2005, 101 ff.

(21) 辻村公一、「静けさの響き」『ハイデッガーの思索』所収、創文社、一九九一年、三三三頁参照。

(22) GA 26, 285. (邦訳三〇一頁参照)。この文章は、若干の変更を加えて一九二九年の「根拠の本質について」の末尾に採録されている。Ferner, vgl. Emil Kettering, *Nähe Das Denken Martin Heideggers*, Pullingen, 1987, 130 ff.

(23) 「語る」はそれ自身からして或る一つの「聞く」である。それは、吾々が、語っている言葉に聞くことである。吾々は言葉を語るのみならず、「言葉から」語る。そのように吾々が語り得るのは、専ら吾々がその都度既に「言葉へ傾聴して聞いてしまっていること」を通してのみである。「吾々は言葉が語ることを聞く」(辻村、前掲書、二九一頁参照。ただし旧字体を現代仮名遣いに改めさせていただいた)。

(24) 酒井潔、「モナド論・基礎有論・メタ有論——もうひとつのハライブニッツ—ハイデッガー問題—」『思想 No. 930』所収、岩波書店、二〇〇一年参照。

(25) このことは「存在と時間」の論述から跡付けることができる。詳しくは、拙論、「存在の問いの遂行としての現存在の可能性」『学習院大学人文科学論集 15』所収、二〇〇六年、参照。

### **Die Sprache in der Sicht von “Nähe und Ferne”.**

#### **Wende vom “Sehen” zum “Hören” im Ausgang von *Sein und Zeit***

Kazunori, WATANABE

Im Denken Martin Heideggers spielt die Sache der Sprache eine fundamentale Rolle. Ich möchte zunächst die Problematik der Sprache in “Sein und Zeit” in Hinblick auf das “Nähe und Ferne” klarstellen. Die Differenz von “Nähe und Ferne” ist nichts anderes als der Grad des Selbstverständnisses des Daseins. Das Wesen von “Nähe und Ferne” besteht in der Entfernung, die durch die sich entfaltende Sprache gebildet wird. In “Sein und Zeit” erklärt Heidegger die Sprache aufgrund seiner “Logos”-Interpretation im Sinne von “sehen lassen”. Man kann also sagen, dass Sprache, Entfernung und Sehen eine gewisse Triade bilden. Das Sehen hat aber seine eigene Grenze, die es selber nicht sehen kann. Das gleiche gilt auch für das Sprechen sowie für das Selbstverständnis des Daseins. Weil die Fundamentalontologie mit dem Leitfaden des Seinsverständnisses durchgeführt werden kann, ist die Grenze des Sehens zugleich die des Sprechens und somit auch die der Fundamentalontologie. Gerade hierin liegt eine entscheidende Wende von Heideggers Methode des “Sehens” zum “Hören”.